

経営者が語る 「経営の転機」

No. 1

社名 南開工業株式会社
代表者 代表取締役 中村 仁
創業 昭和44年9月
設立 昭和46年4月
事業内容 環境関連事業
所在地 〒250-0103
神奈川県南足柄市壺下350
電話 0465-73-2821
URL <http://www.e-nankai.co.jp>
資本金 8640万円
売上高 32億円
従業員 570名

南開工業株式会社
代表取締役社長 中村 仁

エコビジネス多角展開 脱・受注産業にも挑戦

創業以来のリサイクル・リユース事業路線を踏襲
より幅広く、“エコロジー”をキーワードに
積極的な新規事業展開をめざしている



事後対応を伴った撤退の決断を

レンズ付フィルム リサイクル事業からの撤退

当社は創業以来一貫して、資源循環型事業に取り組んできました。私が米国留学から帰国し、復職した平成14年当時は各種レンズ付フィルム、および複写機用消耗品のリユース・リサイクル事業を主に手がけていました。ところがレンズ付フィルムは、デジタル時代の本格到来に伴って遠くない将来、市場消滅も危惧される事態となります。長く当社の屋台骨を支えてきてくれた事業だけにどうしたものか、難しい経営判断を迫られていました。

市場規模が小さくなれば逆に、当社規模の会社にとってやりやすい環境が生まれるのではないかと。やり方次第で十分、採算はとれるだろう。得意先フィルムメーカーの生産の中国移転にあわせ、当社も中国へ進出して事業を継続すべきだ。

私の読みと考えを実父である初代社長に伝え、了承を得ます。工場はその後、平成21年まで稼働を続け、本事業の幕を引くこととなりました。長年携わった仕事でしたが、雇用トラブルなどもなく、我々の役割を果たしてこられたのは幸いでした。なお北米市場における同事業に関しても、メキシコに現地工場を設けて対応を図りました。



エコにはまだまだ、ビジネスチャンスがある

エコ分野をターゲットに 新たな事業創出に取り組み

レンズ付フィルムリサイクル事業の先細りが明確になるにつれ、社内には危機感が募っていきました。早急に新たな事業を発掘し、育て上げなければ会社の未来はない。得意としてきたリユース・リサイクル分野を中心に、広い意味でのエコロジー分野全般に目を向けていこう。そんな意識を社内でも共有し、職制・職種をこえた取り組みに努めてきました。ここ数年、具体的な成果に実を結び始めています。

例えば①大手事務用品メーカーと組んだ事務用品のリユース・リサイクル②PETボトルのリサイクル(日本容器包装リサイクル協会再商品化事業者指定、エコキャップ推進協会&エコキャップネット指定再生事業者)③印刷用刷版のリサイクル④各種プラスチックの再資源化など、従来事業の延長線上に派生した新規事業があります。

また⑤住宅リフォーム用複層エコガラス「ベガスリム」⑥液晶用セルロースフィルム廃品利用による高機能活性炭への再資源化(特許申請中、NEDO助成事業)などまったく新しいチャレンジもあります。

さらに⑦農業生産法人「なんかいファーム」を通じた休耕地活用による地域ブラン



地域環境を思いやり 地球社会に貢献する

ド農産物生産(足柄金太郎米、足柄山金太郎自然薯)⑧食物残渣利用による液肥製造(研究中)など、食品リサイクルループの構築もターゲットのひとつに据えています。

事業構造の根本転換により 独自の「竹林経営」をめざす

当社は、大手フィルムメーカーや複写機メーカーなどの外注先として歩んできた、典型的な受注産業です。経済情勢やお客様の状況によって、いつ急変するかわからない外注事情に対し、事業構造の面で防衛策を講じておく必要があると常々、考えていました。

そこで新規事業の本格開拓を機に、オリジナル商品による消費者市場への直接進出を決断。その第一弾として再生プラスチック利用の園芸用品「エコ鉢、エコプランター」、空きペットボトルをじょうろ代わりに利用できるグッズ「ジョロペット」などを商品化。モノだけつくってあれば済んでいたのに、今度は売れなければ話になりません。花屋さ



しなやかで、したたかな 「竹林経営」へ

んを1軒ずつ当たり、ようやく置かせていただけたものの、月にせいぜい2〜3個しか売れなかったことも。現在では、WEBサイト「エコ販促品.com」と通販カタログを組み合わせた販売方式を導入し、あわせて売上金額の一部を社会貢献に寄贈する仕組みも構築し、一定の評価と支持を獲得しています。社会貢献実績としては、東日本震災復興支援や、あしなが育英会に加え、世界の子どもたちへのワクチン寄贈(平成23年末、累計約5万人分)などでもお役に立ちました。

新しく立ち上げた事業はどれもまだ芽吹きはじめた段階に過ぎません。それだけに今後どんなふうになるか、それだけに今後楽しみです。既存のものも含めたそれぞれの事業を竹のように強く、しなやかに伸ばしていきたい。そして、その一本一本が土壌のなか、根っこの部分からみあい、すなわち理念を共有し、健やかで凛々しい林を作っていく。これが私の思い描く当社の未来像、名付けて「竹林経営」なのです。

